100%LiFE magazine

Special Contents

住空間の可能性を広げる

狭小住宅のアイデア

住空間の可能性をぐんと広げるアイデア集

狭小住宅のアイデア

住宅は施主からのリクエストのほかに敷地や環境、コストや家族構成などの条件を考慮して設計される。そして、「できる限り快適に、楽しく過ごせる」ことを目標に、さまざまなアイデアが編み出されている。

今回は敷地面積やコストの関係などから家の規模が

小さく限られた住宅を取り上げる。コンパクトな面積の中でいかに快適さ、住み心地を向上させているのか。自宅をつくる際のアイデアとして参考にしていただければと思う。

idea 01 スキップフロアにする

スキップフロアは通常の建築に見られるように1階・2階・3階・・・と層を重ねていくのではなく、高さレベルの違うフロアを徐々に上のレベルへとつないでいく手法で、よく見られるのは半階分ほどずつずれながらつないでいくつくりだ。

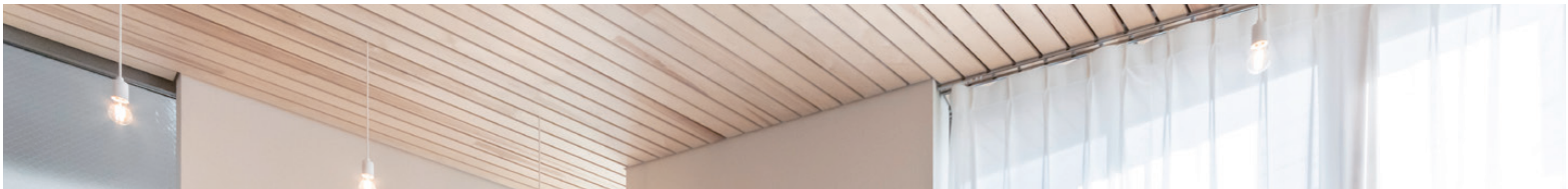
このスキップフロアの最大の特徴はフロアを1階・2階というふうに明確には区切らないことから生まれる。そのために、あるレベルからその上、さらには下のレベルへと空間の連続性が生まれ、閉塞感が生まれにくい。空間がずれることから目線が斜めに抜けるのもコンパクトな空間の中では大きなメリットとなる。

type A　典型的なスキップフロア

この例はスキップフロアで一般的にイメージされる空間に近いだろう。1 階から中 2 階、そして 2 階へと空間の連続感が途切れずにつづき、中 2 階からは 1 階と 2 階の両方に斜めに視線が抜ける。

ここではこのスキップフロアのアイデアに加えて、家族で多くの時間を過ごすリビング・ダイニングの面積を大きめに取っている。また、DK 部分に対してリビングの天井の高さを 3.1m と高くしてさらに広さ感をアップ、そしてリビング側に大開口をつくってふんだんに光を採り入れるとともに遠くまでの視線の抜けを確保するなどの工夫を凝らして面積以上の開放感もつくり出している。〔井岡邸・地上 2 階・72・28㎡・IN STUDIO 設計〕

リビング側から見る。リビングの天井は3.1mと高く取っている。



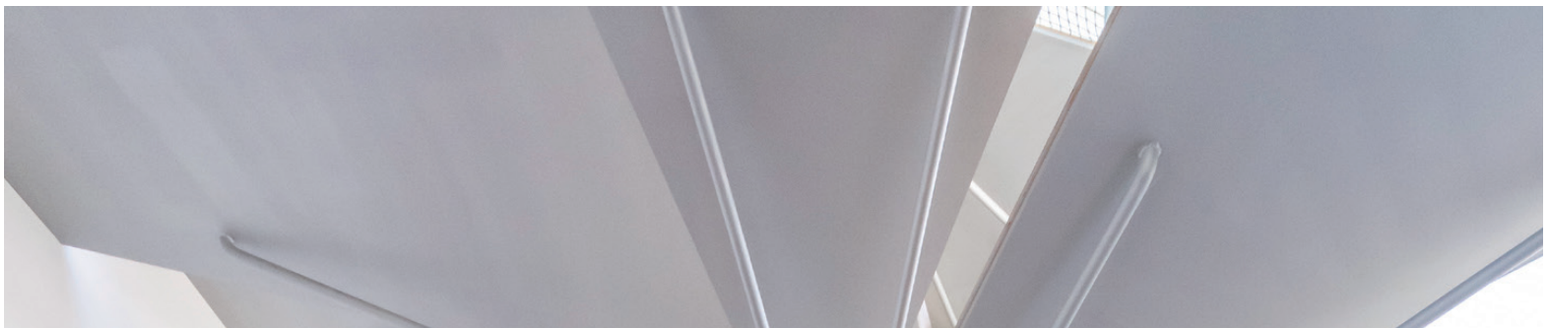
リビングの開口からは視線が遠くまで抜ける。玄関スペースはLDK との間に家具を置いたのみで空間を区切っていない。

中 2 階のスペースから視線が上下に抜ける。

type B　階段を活かしたスキップフロア

この例でも同じスキップフロアを採用しているが、螺旋階段を家の真ん中にすえている。奥に細長い敷地ゆえのアイデアだが、この階段をたんに上下の移動に使うにとどまらず、面積以上の広がり感を感じさせる装置としても使っている。

まず、スキップフロアのメリットである目線の上・下への斜めの抜けを最大限活用して向かいのスペースの奥までを同一スペースと感じさせる。さらに、階段とフロアをつなぐ踏み板を大きく取り、そのほかの踏み板も座れるように広めにデザイン。このことで各スペースとこの階段との連続性をつくり出し、また空間をより広く感じさせている。移動用に徹した階段は多くの場合デッドスペースになりがちだが、生活空間にとけ込んだこの階段はひとつの部屋か庭のような存在となっている。〔林邸・地上３階・54.8㎡・山田紗子建築設計事務所設計〕



リビングから見る。向かいのダイニングキッチンの壁までが同じスペースに感じられる。階段の横につくられた大開口も開放感と広がり感をつくり出すことに大きく寄与している。

奥へと細長い空間。１階のダイニングキッチンを奥に見る。

リビングと接する踏み板が大きくつくられていて、連続感をつくるとともに空間をより広く感じさせる。

type C　階段を活かしたスキップフロア

この例もフロアのレベルがずれながら空間がつながるという点からはスキップフロアといえるだろう。敷地が狭いために、先の例とは逆に、通常は移動の時以外には使い道のない階段をこれ以上はないといえるほどのミニマムな形でつくっている。同じ理由から廊下のスペースはまったくつくっていない。

壁をつくって空間を区切ると閉塞感が生じるため水回

り以外には設けていない。それぞれのフロアの面積は小さいが1層上のフロアだけでなく2層3層上のフロアまで視線が斜め方向にも抜けていくことも、ここでは狭さを感じさせない大きなポイントとなっている。フロアをフラットにせずレベルを変えることで、それぞれ用途の異なる場所がいくつも生まれている。〔北村邸・95.54㎡・flathouse 設計〕

テラスと浴室、ダイニングとリビングのレベルがすべて異なる。テラスに設けた大開口が室内に光をふんだんにそそぎ込む。

中央の螺旋階段を軸にフロアが半時計回りにレベルを変えて上昇していく。手前のフロアの下には地下室がある。

ベッドの置かれたスペースから見る。奥に玄関がある。

idea 02

狭さを利用して心地良い空間をつくる

都心の旗竿敷地に立つこの家の建築面積は8坪弱。このつくりもスキップフロアといっていいだろう。メインのスペースと階段室および付随するスペースとがずれてつながっているのである。

ここでの工夫は、開口と吹き抜けをうまくつくりこむことにより採光にも気を配り狭さを感じさせないこと、そして、余裕のない横幅を逆手にとって1階のミーティングスペースや2階のリビングなどのように絶妙のスケール感をもった心地よい空間を生み出していることがあげられる。身体的な感覚にフィットさえすれば、「狭い＝窮屈で居心地が悪い」には必ずしもならないということだ。

スキップフロアならではの斜め方向への視線の抜けに加え、吹き抜け部分では上方向への抜けも心地良さを生み出しているが、各階まったく異なるつくりにすることにより個性豊かな場を生み出し、住人はその空間の変化を楽しみながら住むことができる。〔吉田邸・地上3階地下1階・94.87㎡・吉田州一郎＋吉田あい／アキチ アーキテクツ〕

玄関から地下のシェアオフィススペースと１階のミーティン

グスペースを見る。模型の断面を見るような不思議な印象を受ける。

1 階のミーティングスペースは第 2 のリビングでもある。身体にフィットしたスケール感が心地良い。

左上のロフト部分にモノを集めて下の空間をすっきりとさせ

ている。天井の低いキッチンに対して右の吹き抜けの高さを3.9m、奥のリビングの高さを 3.4m と余裕をもたせて空間に変化をつくり出している。

２階のリビング部分から見る。フローリングとタイル、土間と場所により床の素材を変えている。柱梁のスチール材の黒色とあわせてこの場所に狭いながらも豊かな空気感をつくり出している。

idea 03

建築と家具を一体化する

狭い空間の中に家具を置くとさらに空間を狭くしてしまう。そのため、建築と家具とを一体化して設計している。

ダイニングの隣につくられたリビング的なくつろぎのスペースにクッションが置かれているが、この場所には上の寝室に上がるための廊下のような役割ももたせている。まさに家具＝建築だ。全フロアに床下暖房を入れ、これも建築と一体化させている。設備機器も表に出していない。もちろん冷蔵庫は表に出さずビルトイン。さらに、斜線制限によって斜めに傾斜した壁の圧迫感を減ずるために、キッチン部分はダイニング部分よりも 23cm ほど床のレベルを下げている。

全体がワンルームのような感じでつながるこの家では、家族同士がほど良い距離感でつながりつつそれぞれの居場所がつくられている〔青島邸・地上 3 階地下 1 階・102㎡・at/la 設計〕

天井は張らず250cmの天井高を確保。奥のリビング的なスペースにはクッションが置かれている。この場所は、上の寝室、テラスに向かうための廊下的なスペースでもある。

リビング的なスペースからダイニング越しにキッチンを見る。キッチンはダイニングよりも床レベルを下げている。空間を区切る鉄の壁の厚みは 9mm。

書斎スペースを見る。椅子以外は造り付けの家具。棚の後ろにある子ども部屋は書斎から少し床を浮かせている。

地下につくられた事務所スペース。小さなスペースがレベルを変えてつづく。

idea 04 床面積を削り天井を高く取る

狭い中でもできるだけ床面積を取ろうとするのが普通だが、快適に住むという観点からは、条件が許すならば逆の発想をしてみることも必要だ。この家では階高を 2.2 m に抑えたうえで、ある場所では 2 層分取り、ある場所では 1 層分とメリハリを付けている。延床面積は当然少なくなるが、2.2m × 2 という住宅としては例外的な高さによって気持ちの良い開放感を生み出している。床のない部分をつくることで、縦方向だけでなく、横・斜めと視線が抜けていく。

木造でも建築可能な規模だが、空間をより広く感じら

れるように、より小ぶりで薄い部材ですむ鉄骨造が選択されている。〔K 邸・地上 3 階地下 1 階・103.84㎡・山路哲生建築設計事務所＋釜萢誠司建築設計事務所設計〕

階高は 2.2m。この場所は 2 層分あり狭さを感じさせない。鉄骨なので将来の増床も可能だ。

手前の部分から奥の寝室へはいったん上に上がってからまた下がる。移動距離をあえて遠くすることで狭さを感じさせない工夫。

地下のキッチン上につくられた吹き抜け。ペントハウスの天井

まで見通すことができる。

ペントハウスにつくられた浴室。浴室だけのシンプルなつくりが気持ち良い。

idea 05

空間に変化を付けつつ外部的空間をつくる

この例も床面積を多くとるよりも開放感を優先している。水回りと個室をボックス状の空間に収め、ダイニングキッチンは吹き抜けに連続させて開放感を持たせている。

吹き抜け部分の高さは 5.6 mありそれがボックス状の部分に沿ってくつくられることで住宅空間とは思えない風景と開放感をつくり出している。また、吹き抜け部分にトップライトを設け、庭と連続するように 1 階床を土間とすることで外部を思わせる開放的な快適さも生み出されている。〔尾崎邸・地上 2 階・87.07㎡・no.555 一級建築士事務所設計〕

左奥がリビング。高さが 5.6 mある。右のダイニングキッチンの高さは 2.1m で、ボックス状空間がずれて配置されていることとあいまって限られた空間に変化をもたらしている。

リビングからダイニングキッチンを見る。

主寝室から見る。

トップライトからの光が１階の土間部分をさらに外部空間のように感じさせる。